

## 熊本大学学術リポジトリ

### Kumamoto University Repository System

Title	卒業式に於ける中川學校長告辭
Author(s)	中川, 元
Citation	龍南會雜誌, 29: 1-1
Issue date	1894-10-01
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2298/4427">http://hdl.handle.net/2298/4427</a>
Right	

# 龍南會雜誌第貳拾九號

## 卒業式に於ける中川學校長告辭

本日第三回卒業式を舉行し、貴顯紳士の臨場を辱くし、茲に卒業証書を授與せり。思ふに卒業諸子の光榮は更にも言はず、父母兄弟且つは本校の光榮此上やはあるべき。蓋し諸子の此光榮を荷ふに至りしは、本校職員諸氏の耳提面命いともく、懇に陶浴を加へられたるにこそ由れ、抑も亦諸子前途の大任を重んじ、以て身を檢し志を操り、日夜刻苦瑩雪に對し、多年一日の如く研鑽に勤めたるにあらずば、いづれか斯に至るとを得ん。さても學問は博し、事業は多し。今や諸子の各々此校を出つる、更に高等の教育を受んとするもあり、將た民間の實業に就かんとするもあり。則ち其任益々重く、其道愈々遠きぞかし。夫れ巖巖の山に登らざれば水取の玉は獲るとかなはず、千尋の海に入らざれば珠の珠は采るとあたはず。今日泰平の御代に逢て、厚生の道開けに開け、學問の業進みに進みたりとは言へども、目を學ばば山海の璞玉累々たり、民間の遺利穰々たり、之を拾ひ之を収めんと、豈に諸子の大志重任にあらずや。苟も此大志を守らず、其重任を負はず、あたらず寶山に入り深淵に臨みながら、一つの底寶だにも獲ずして歸り、國家の益をも圖らずして止むたらんには、掛卷も畏き吾天皇の大御詔に副へ奉らざるのみかは、内にしては父兄の恩に背き、外にしては本校の名を墜し、諸子の面目なき將た何を以てか此世に立ち得べき。諸子よ、爾後彌や益々其大任を重んじ、其心身を束ね、以て途の半の蹉跌あく、生涯の光榮を荷はんと、返すくも望むあり。茲に一言もて諸子の業を卒しとを祝し、并て將來の規を諒ぐ。